国際農業工学レポート（４月２８日分）

・農業工学でできそうなセクター間の連携について考えられること

農業工学の広大な分野の中で、外国人を対象にした観光政策との関連を考える。日本は今日、外国人観光客を増加させることに国策として取り組んでおり、実際に増加している。しかし、外国人観光客の行動・目的は日本人が想定するものとは異なっており、実際の期待に応じた対策の不備が指摘される。例えば、大手旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」の「外国人に人気の日本の観光スポット 2014」においては、都内のスポットはベスト 10 に１つしかない（新宿御苑（８位））。日本人は浅草浅草うるさいが浅草は２５位です。残念。

実は、その外国人観光客の期待として、「自然の中に身を置く」「日本人の伝統的な生活・文化を体験する」といったものがある。それを示すデータは多いが、例えば観光庁の調査では、訪日観光客が次回期待したいことの内「自然、四季、田園風景」の割合は全項目の中で４位（３８．２％）であり、その他の項目でも「自然・景勝地観光」「歴史的・伝統的な文化体験」等が上位である。

これらを潜在的ニーズと見たとき、その対応としてグリーンツーリズムに注目したい。これは、「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動（農林水産省 HP）」のことだ。その基盤を整え推進していくことは、農山村の振興、伝統的農業・文化の価値への見直し、（滞在中の食事提供を通した）日本の農産物の PR 機会獲得といった、多様な利益につながり得る。

ただ、これらの利益を目指すあまり、日本において「グリーンツーリズム」の推進は、「国内の都市住民」を対象として自治体など農林水産のセクションが主に担ってきた（実際に「グリーンツーリズム」と検索すれば当たるのは農水省の HP である）。その結果、ありふれたグリーンツーリズムが国内市場に並んでいるという一つの失敗が指摘される。しかし、本来これら事業を成功させるためのノウハウを持っているのは観光産業界であると考えられる。市場を世界的なものに拡大することを考えるとき、訪日外国人がどういったことを期待し、日本の農山村がそれにどう応え得て、そのための基盤（施設・設備など）としてはどういったものが必要なのか、といったことに関しての知恵は観光産業が担えばよい。しかし、実際に農村の整備にあたり、肝心の農村・農業における利益を調整できるのは農業工学の領分である。その両者の連携が上手く進められるなら、多大な利益がもたらされると考える。